

地元の心を柔らかく温かく

広げてくれる世界

——杉みき子雪国の作品を読む——

鈴木 義則

1 新潟と雪

今年（二〇一九年）、新潟の冬は少雪であった。家の玄関口や駐車場の除雪をするまでもなく、降っては消え降っては消えていたので、近年にないありがたい冬だった。「雪が少なくて助かりましたね」が、挨拶がわりとなった。こんな年はめつたにない。

新潟は、雪国である。年によっても、またその土地によっても大きな違いがある。一般的には、十一月の下旬から山間地で初雪を迎え、十二月から三月の末まで雪との生活を強いられる。ピークは、十二月の末から二月の半ばまで。ここを過ぎると気温の上昇にともなう雪も少しずつ減りはじめ、三月の終わりから四月にはずっと待った春がやっ

てくる。冬の制限された生活からいつきよに開放された気分は、ほんとに嬉しいものである。

雪国の人にとって、雪（冬）の効果は誰もが知っている。昔からいろんな工夫を重ね、災害を避け、利用し、また遊んできた。それは頭の中では分かっている、やはり「できれば避けたい」と感じている。寒さもそうだが、雪という形のあるものに遮られ、生活のうえで大きな支障をきたす。正直「雪は、厄介で無い方がいい」ということになる。ましてや「冬（雪）が好き」となるとほど遠くなる。

そんな影響からか、これほど生活と深くかかわっていないが、「冬（雪）を題材にした、冬（雪）を背景にした児童文学作品」となると数がうんと減ってくる。そのほとんどが、単発ものである。雪国に根をおろし、雪国の生活を描いたものはほとんど見当たらないといつていい（新潟の海岸線が長いのに、海を題材にした作品がないのとよく似ている）。

冬（雪）そのものは、新潟の人にとって生活上避けられないものだが、作品を書くうえで心の障害になっているようである。

そんな中、上越市在住の杉みき子は稀有な作家である。上越市（旧・高田）に生まれ、上越市で育ち、ずっと上越市に住みながら、そこでの生活を舞台に、作品を次々と発表している。杉は、そんな自分の住む土地を次のようにいう。